

本日の学び テーマ:「苦難を自ら負って」 テキスト:マタイ26章47節-56節

【理解の手がかりとして】

本日の箇所を紐解く前に、登場人物の一人であるイスカリオテのユダについて考察しておく。

イスカリオテのユダと言えば、イエス様を売り渡した裏切り者として、その名をイメージする。ユダはたしかに自分の師であったイエス様を裏切り、銀貨30枚でユダヤ人の手に引き渡す手引きをした。けれどもそのあと彼は後悔したのだった。しかし後悔しても遅く、そして自戒の念を強くした彼は、「銀貨を神殿に投げ込んで立ち去り、首をつって死んだ」(マタイ27:5)のだった。自分の犯した罪に苦しみ、自ら命を絶った人、それがユダ。ここに「裏切り者」という一語で悪者扱いできない、彼の真面目な人間性を見る。

ユダがなぜ主イエスを裏切ったのか、その理由について W.バークレーは三つの理由(その可能性)を挙げる。それらは①貪欲と悪意、②幻滅から生まれた激しい憎悪、③行動への駆り立て、の三つ。以下、それらの推察について要約する。

- ① 貪欲と悪意…ユダが恐ろしい取引を行ったのはベタニアの女性の香油注ぎ(26:6-13)の直後である。ヨハネ福音書は、ユダが高価な香油を塗るのに反対したのは、彼自身が盗人であり、財布を預かっていて中身を誤魔化していたから(ヨハネ 12:6)と伝えている。もしユダの裏切りの原因が貪欲にあるならば、金への執着がどれほど恐ろしい罪を犯すかの悪例である。
- ② 幻滅から生まれた激しい憎悪…ユダヤ人の中には、ローマ人をパレスチナから追い出すために、殺戮・暴動もいとわない過激な愛国主義者がいた。ユダも又このような愛国主義者で、イエス様に対してそのような一大反乱のリーダー像を期待していたのかもしれない。ところがその期待に反して、イエス様を選んだのは十字架への道であった。結果、期待が幻滅となり、激しい憎悪となったのかもしれない。
- ③ 行動への駆り立て…ユダは、その裏切りの末にイエス様が死ぬとは考えていなかった。その引き渡しによって、イエス様の行動(まさに②で期待していた反乱)を駆り立てるためであったのではないか。この点において、後のユダの後悔と自死(27:3-10)の理由が説明出来る。

もしイスカリオテのユダがいなかったら、イエス様は十字架に死ななかったのか、という問いを立ててみる。…応えは「否」。イエス様の十字架の贖い(人間の罪の救い)の計画は、その誕生(クリスマス)において既に始まっていた。そのためにイエス様はこの世に人間として来られたのである。完全に一人の人間として、この世のあらゆる苦難を経験され、そして、エルサレムに入城し、十字架のところまで歩いて行かれる、これは何ものも邪魔できない神の御計画。

…残念ながら、ユダは自ら死を選んだ。自分の犯した過ちの重さに耐え切れず、彼は自らのちを断った。ユダの悲劇はここにある。なんとか生き延びて、イエス様の復活に救われたら良かったのに、あのペトリのように、と思ったりもする。しかしその悲劇すらも、預言者エレミヤの言葉の実現であったと聖書は記す(27:9)。それもまた神の計画の一つであった、と。ここに私たち人間の思いの届かない神の計画の深みがある。バークレーは言う。「その理由は何であったとしても、ユダの悲劇は、イエスをそのまま受け入れずに、自分の計画にイエスをあてはめようとしたためであった。…ユダの悲劇は、自分が神より賢いと考えた者の悲劇である」と。

さて、ここでようやく本課のテキストに入っていくが、ユダヤの指導者に主イエスがゲッセマネの園に退いているとの情報を提供したのはユダであった。そしてそのユダの後ろには、ユダヤの指導者たちと「剣や棒を持って」(26:47)武器による暴力を伴った大勢の群衆であった。

しかしイエス様は一切の抵抗を禁じられた。マタイ福音書は弟子の一人が剣を抜き、命がけの抵抗を見せたと伝えるが、ヨハネ福音書はその弟子がペトリであったことを伝えている(ヨハネ 18:10)。※なぜヨハネ福音書

はその名を記したのか、それはマタイが福音書を書いた頃はまだ、主を守るために立ち上がった弟子の名を公にすることは危険であったからであろうとも考えられている。

再びバークレーの解釈を紹介しよう。この箇所から学ぶ「イエスの死」に関する二つの視点である(筆者要約)。

- ① 自発的なイエスの死…イエス様はゲッセマネの園においても、秘かに逃れて死を免れることはできはず。また神の力をもって敵を退けることもできはず。しかしイエス様はそうならなかった。それはその死が自ら選びとられたものであり、そこには目的があったからである。
- ② 神の目的のために選び取られた死…イエス様は、預言者があらかじめ示していた道を進まれた。それは愛だけが、唯一の道であったからである。「剣を取る者は皆、剣で滅びる」(26:52)とあるように、暴力は暴力を生む。イエス様は力、戦い、暴力、圧力は何もかも解決せず、ただ一連の悪を生み、人間性の悪い面だけを誘発することを知っておられた。また神の目的はただ「犠牲的な愛によってのみ達成されることを知っておられた。

なるほど、この理解と次なる解説が響きあう。「神のわざは、言うまでもなく武力のような力わざはもとより、諸々の方策、策略、政治力等でなしうる性質のものではない。しかし、人間は事を成し遂げるのには、これらのものこそがその方途であると考えて止まない。主イエスの弟子たちもまた、これにもれなかった。しかし、主イエスが十字架に渡されゆきたもうたのは、すなわち主イエスは、創造者であって父にいます神のもとでの人の命の危急存亡の現実に身を挺していかれたのである。…人の子イエスが、その神の徹底した平和のわざにおいて、力にいて立つこの世の罪の力の根底を撃つに至ったからにほかならない。この世が底知れず恐れるのは、この力なのだ。」(大沼上)

この世が底知れず恐れる力、それはこの世を支配している価値観や力とは真逆のものなのだろう。ユダ(またペトロ)は決して私たち一人ひとりとは別物ではなく、彼らの内に私たちを見、彼らの過ちと後悔に私たちの実像を重ねさせられる。またこの現世界の有り様はどうだろうか。——「剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない」(イザヤ 2:4 終末の平和)世界と成ることを祈る。

【聖書教育より】

「イエスさまが大切にされた事と弟子たちの選びの違いはどこにあったのでしょうか。」(大人クラス)